

編集後記：個人的な趣味の話である。釣り、登山、スキーといったアウトドア系は好きだが一度離れると再開するのが億劫でなかなか長続きしない。一方、インドア系の読書や音楽（演奏／鑑賞）は長年続けられる。自分の時間を好きに使うことが趣味の本質であれば、研究活動も趣味になるのだろうが、最近は夜中や週末まで熱中して作業することがほとんどなくなった。時間を忘れるほど面白い研究課題から遠ざかっているのかもしれないが、あまり深く考えたくない。

私の本棚は外国人作家のSF（水色背表紙の文庫本）で埋まっている。私は気に入った作家の作品を片っ端から読むことが多いが、日本人作家の話題作などを手にすることもある。通常はネットでまとめて購入した文庫本が重ねられているが、時には在庫がなくなることがある。先日、次に読む本の在庫がなかったため、本棚から埃まみれの文庫本を取り出して10数年ぶりに読み直した。新田次郎の山岳小説である。本名は藤原寛人、多くの方がご存知の通り藤原咲平の甥にあたる気象庁職員だった人で、富士山頂観測所に勤務、富士山レーダーの建設責任者も務めた。新田次郎の気象に関する描写はすごい。雨や雪はもちろん、目に見えない風、気温、気圧までが彼の文章ではありありと

描かれる。学術論文の図に示されるグラフなどより説得力があるかもしれない。

ところで、貴重な読書時間である通勤時の電車の中であるが、最近は本や雑誌を広げている人よりも携帯電話やゲーム機などの電子機器を使っている人が多数派である。しかし電子端末を見ている人の中には読書をしている人もいるようである。電子書籍はまだ品揃えが少ないということで、紙の本を裁断してスキャンすることで電子ファイルを作ることもできるらしい。ご存知の通り「天気」は過去の発行誌についてもPDF ファイルをWebで公開している。電子書籍端末をお使いの方は「天気」も加えてはどうだろうか。論文や学術解説でも内容が面白ければ趣味の読書として十分に楽しめるだろう。主人公が様々な事件に巻き込まれどんでん返しの結末を迎えるという小説の技法を論文に応用するわけにはいかないが、これまで解決できなかった課題について具体的な問題をどのようにして解決したのかという基本がしっかりしていれば、面白くて良質の論文ができるであろう。読者を惹きつけて楽しませてくれる多くの原稿が「天気」に投稿されることを願っている。

（佐藤晋介）